

フランツ・ボアズにおける「文化」概念の再検討 (2)

——『未開人の心性』1938年版を中心に——

沼 崎 一 郎

はじめに

本稿の課題は、フランツ・ボアズ (Franz Boas, 1858-1942) が最晩年に到達した「文化 (culture)」概念がどのようなものであるかを、主著『未開人の心性 (The Mind of Primitive Man)』改訂版 (1938年版) における用法の分析を通して明らかにすることである¹。前稿 (沼崎 2013) に引き続き、文明 (civilization) と文化 (culture) とをボアズがどのように使い分けているのか、テキストに即して丁寧に分析したい。

『未開人の心性 (The Mind of Primitive Man)』改訂版 (以下、『改訂版』と記す) は、フランツ・ボアズが亡くなる 4 年前、80 歳の時に刊行された著作である。講義録の寄せ集めの観が強かった 1911 年の初版 (以下、『初版』と記す) とは構成も異なり、かなり筆が加えられた『改訂版』は、ボアズ最晩年の思想を知るには最適の著作である²。最晩年に至って、『初版』で表明された思想が変化しているのか否かが、本稿の検討課題となる。

『初版』から『改訂版』まで、27年の月日が流れている。この間、大学における人類学教育の拡大に合わせて、教科書として用いられることを想定した概説書や入門書が次々と出版される。1910年代にはロバート・H・ローウィ (Robert H. Lowie) の小著『文化と民族学』(Lowie 1917) があるだけだが、1920年代に入ると、ローウィの『未開社会』

¹ 改訂版も、初版同様ニューヨークの The Macmillan Company から出版されている。その後、ハースコヴィッツの序文を付した普及版がニューヨークの Collier Books から 1963 年に出版され (Boas 1963 [1938])、さらに Free Press から 1965 年に再版された (Boas 1965 [1938])。いずれも既に絶版だが、最も普及し、今でも入手しやすいのは Free Press 版だと思われるので、本稿の引用には Free Press 版を用いる。

² 本書刊行の 2 年後、ボアズ 82 歳の時に『人種、言語および文化』(Boas 1982 [1940]) という論文集が出版されているが、そこに新たな考察は見られない。なお、同書の抄訳が 2013 年に刊行されている (ボアズ 2013)。

(Lowie 1920), アレグザンダー・A・ゴールデンワイザー (Alexander A. Goldenweiser) の『早期文明』(Goldenweiser 1922), アルフレッド・L・クローバー (Alfred L. Kroeber) の『人類学』(Kroeber 1923), クラーク・ウィスラー (Clark Wissler) の『人間と文化』(Wissler 1923) と『社会人類学入門』(Wissler 1929), ウィルソン・D・ワリス (Wilson D. Wallis) の『人類学入門』(Wallis 1926) が出版されている。1930年代の教科書的な著作としては, ポール・ラディン (Paul Radin) の『社会人類学』(Radin 1932) と『民族学の方法と理論』(Radin 1987 [1933]), ローウィの『文化人類学入門』(Lowie 1934) と『民族学理論の歴史』(Lowie 1937), ラルフ・リントン (Ralph Linton) の『人間の研究』(Linton 1936), ゴールデンワイザーの『人類学』(Goldenweiser 1937) がある。教科書以外では, クローバーの論文「超有機的」(Kroeber 1917), エドワード・サピア (Edward Sapir) の古典的論文「文化, 本物と偽物」(Sapir 1924), 社会的インパクトの大きかったマーガレット・ミード (Margaret Mead) の『サモアにおける成人』(Mead 2001 [1928]) と『ニューギニアにおける生育』(Mead 2001 [1930]), ルース・ベネディクト (Ruth Benedict) の『文化の諸様式』(Benedict 2005 [1934]) がある。

そこで本稿では, これらの著作に注目し, 1910年代から1930年代のアメリカ人類学において, 「文化」概念および「文明」概念がどのように用いられていたかを先ず概観する。それは, ボアズ最晩年の思想の位置づけを明らかにするために不可欠な準備作業だからである。

ボアズ自身も, 『初版』と『改訂版』の間に多くの著作をものしている。単行本としては, 『未開芸術 (Primitive Art)』(Boas 2010 [1927]; ボアズ 2011), 『人類学と現代生活 (Anthropology and Modern Life)』(Boas 1928, 1932) がある³。また, 『改訂版』出版の年, ボアズ編集の教科書『総合人類学』が刊行されている (Boas and Others 1938)。論文も多数あるが, 本稿では『改訂版』のみを分析の対象とする。『改訂版』は文字通りボアズ思想の集大成だからである。

³ 『人類学と現代生活』は, 1928年に初版, 1932年に改訂版が W. W. Norton and Company, Inc. から出版されている。改訂は細部に止まり, 初版と内容の差は少ない。1932年版は, 1962年にルース・バンツェル (Ruth Bunzel) の序文を付して Dover Publications, Inc. から再版され, その復刻版が1986年に同社から刊行されている (Boas 1986 [1932])。また1932年版は, 2001年にはハーバート・S・ルイス (Herbert S. Lewis) の論考が後書として付された版が, 2009年にはそれにルイスの新たな序文を付した版が, Transaction Publishers から出版されている (Boas 2009 [1932])。

Ⅰ 1910～30 年代アメリカ人類学における文化と文明の用法

クローバー、ゴールデンワイザー、ローウィ、サピア、ラディンの 5 人は、ボアズの直弟子のなかでは第一世代に属する⁴。クローバーはドイツ移民二世で、1890 年代後半にコロンビア大学に在籍し、1901 年ボアズの下でコロンビア大学では最初の人類学博士号を得た。ゴールデンワイザー、ローウィ、サピア、ラディンは、いずれも幼少時に東ヨーロッパからアメリカに移住、1900 年代に相前後してコロンビア大学に在籍し、新しい「アメリカ学派 (The American School)」を自称した (Deacon 1997: 97-110)。ベネディクトとミードは、1920 年代にコロンビア大学でボアズに学んでおり、弟子としては第二世代に属し、第一世代の影響、特にサピアの影響を強く受けている。

ウイスラー、ワリス、リントンは、ボアズ学派にとっては周辺的な存在である。ウイスラーは、インディアナ大学で実験心理学を学び、修士取得後、コロンビア大学に移って 1901 年に心理学の博士号を取得しているが、コロンビア大学在籍時にボアズの授業を聴講し、1902 年からニューヨークのアメリカ自然史博物館でボアズの助手の職を得ている (Freed and Freed 1992: 472-474)。一時はコロンビア大学で人類学講師も務めたが、次第にボアズとは疎遠になったようだ (Freed and Freed 1992: 474)⁵。ワリスは、オックスフォード大学でロバート・R・マレット (Robert Ranulph Marett) の下で人類学を学んだ後、ペンシルベニア大学で哲学の分野で博士号を得ているが、博士論文の素材は人類学的であり、ボアズの知己を得て、ゴールデンワイザー、ローウィ、サピア、ラディンらとも交友があった (Spencer and Colson 1971)。リントンは、スワスモア大学在学中から考古学に触れ、ペンシルベニア大学の修士課程でも考古学を学んだ後、コロンビア大学の博士課程に進んでボアズの指導を受けたが、ボアズには親しめず、第一次世界大戦の軍役を挟んで、帰国後はハーバード大学に転じ、そこで人類学の博士号を得ている (Kluckhohn 1958)。

以下、早くから文化概念を強調したローウィとウイスラー、対照的に文明概念を用い

⁴ クローバーについては Steward (1962) と Kroeber (1970)、ゴールデンワイザーについては Wallis (1941)、ローウィについては Lowie (1959) と Steward (1974)、サピアについては Darnell (2010)、ラディンについては Braun (1998) を参照している。Deacon (1997) の第 5、12 章も当時のボアズ学派を知るには有益である。

⁵ クローバーの回想によると、ウイスラーは「アメリカ学派」を名乗るボアズの弟子たちを「あの変な外人と半外人ども (those queer foreigners or half foreigners)」と呼んでいたそうである (Deacon 1997: 104)。

たクローバーとゴールデンワイザー、個別民族文化の研究を重視したラディン、サピア、ベネディクトとミードの順に検討していく。その後、比較のために、ワリスとリントンについて検討する。

1. ロバート・H・ローウィ

1917年の『文化と民族学』第一章の冒頭で、ローウィは、ヨーロッパ大戦によって文化という語の民族学的用法が一般にも広まったと述べ⁶、その簡潔な定義としてタイラーのそれ (Tylor 2010 [1871]: 1) を次のような形で引用している (Lowie 1917: 5-6, 中略は原文):

“Culture . . . is that complex whole which includes knowledge, belief, art, morals, law, custom, and any other capabilities and habits acquired by man as a member of society.”

つまり、“or Civilization”というタイラーの挿入句をそっくり取り除いたのである。そして、タイラーの定義の後半部に注目し、“The ‘capabilities and habits acquired by man as the member of society’ constitute a distinct aspect of reality that must be the field of a distinct science . . .”と述べる (Lowie 1917: 26)。この“distinct aspect of reality”こそ文化であり、“Culture is a thing *sui generis* which can be explained only in terms of itself”である (Lowie 1917: 66, 強調は原文)。なぜなら、“*Omnis cultura ex cultura*”なのだから (Lowie 1917: 66, 強調は原文)。具体的には、以下の通りである (Lowie 1917: 91):

When we find that a type of kinship terminology is determined by exogamy or matrilineal descent, we have, indeed, given a cultural explanation of a cultural fact; but for the ultimate problems how exogamy or maternal descent came about, we may be unable to give a solution.

さらに、ローウィは次のように言う (Lowie 1917: 95, 強調は原文):

⁶ 後注9参照。

We may not be able to explain all cultural phenomena or at least not beyond a certain point ; but inasmuch as we *can* explain them at all, explanation must remain on the cultural plane.

ローウィは、本書において文化という語を単数形でも複数形でも多用するのであるが、文明という語も 30 箇所以上で用いている。その用法は至極一般的なものが多いが、“Hopi and Navajo civilization” (Lowie 1917 : 51) という用例に注意したい。アメリカ先住民にも文明の存在を認めるということは、進化主義的な人類学ではありえなかったし、当時の一般人の常識にも反するものだったからである。

1920 年の『未開社会』においては、社会組織研究における単線的進化図式の論駁に主眼が置かれ、文化の概念は論じられていない。注目すべきは、ローウィが末尾で文明を “that planless hodgepodge, that thing of shreds and patches” と呼んでいることだろう (Lowie 1920 : 441)⁷。文明は無計画な寄せ集め、つぎはぎだと言うのである。

1934 年の『文化人類学入門』は、1917 年の『文化と民族学』における文化の定義を踏襲している (Lowie 1934 : 3, 強調は原文) :

In the scientific sense, “culture” does not mean unusual refinement or education, but the whole of social tradition. It includes, as the great anthropologist Tylor put it, “capabilities and habits acquired by man as a member of society.” Culture includes *all* these capabilities and habits in contrast to those numerous traits acquired otherwise, namely by biological heredity.

1937 年の『民族学理論の歴史』でも、文化の定義は網羅的である (Lowie 1937 : 3) :

By culture we understand the sum total of what an individual acquires from his society—those beliefs, customs, artistic norms, food-habits, and crafts which come to him not by his own creative activity but as a legacy from the past, conveyed by formal or informal

⁷ 進歩の頂点としての西洋文明という観念に批判的なローウィは、1929 年には『我々は文明化しているのか?』(Lowie 1929) という評論集を出版しているが、あまり評判は呼ばなかったようである (Steward 1974 : 182)。

education.

ローウィは、本書の冒頭（上記引用の直前）に“Ethnography is the science which deals with the ‘cultures’ of human groups”と書いており、文化という語を複数形で使用している（Lowie 1937: 3）。しかし、機能主義を批判的に論じた後半部では、次のように書くのである（Lowie 1937: 235-236, 大文字と強調は原文）:

First and foremost, a science of Culture is not limited to the study of so many integrated wholes, the single cultures. . . . A science of culture must, in principle, register every item of social tradition, correlating it significantly with any other aspect of reality, *whether that lies within the same culture or outside*. . . . Social tradition varies demonstrably from village to village, even from family to family. . . . There is only one natural unit for the ethnologist—the culture of all humanity at all periods and in all places. . . .

複数の文化を扱うのは、あらゆる時代のあらゆる場所の人類全体の文化を科学するためなのだ。個別文化の特質や歴史を明らかにするだけでは文化の科学として不十分だと、ローウィは主張しているのである。このような1937年時点でのローウィの主張は、いかにもタイラー的ではないだろうか。彼がタイラーの定義を使い続けた理由は、ここにあるのかも知れない。

2. クラーク・ウィスラー

ローウィ同様、早くから文化概念を多用したのはウィスラーである。1923年の『人間と文化』では、第1章「比較の視点 (The Comparative Point of View)」において、文化という語の教養主義的な意味合いが除去され、文化は「生活様式 (the mode of life)」または「生活周期 (the round of life)」であると定義される（Wissler 1923: 1, 強調は原文）:

. . . in history and social science we speak of the mode of life of this and that people as their culture. Thus the Eskimo and Hottentot have no less each a culture of their own, than the French or the English. . . . the whole round of life in England is not very dif-

ferent from that to be observed in France, whereas the life cycle of an Eskimo has very little in common with that of a Hottentot. This round of life in its entire sweep of individual activities is the basic phenomenon to which the historian, the sociologist, and the anthropologist give the name, *culture*.

そして、ウィスラーは「我々も文化を持つか?」とアメリカ人（アングロサクソン系の「白人」）読者に問い、次のように答える（Wissler 1923 : 3-4）：

It will be quite impossible for us to get so far outside of this manner of life of ours, as to see it as an Eskimo would, but still a little exercise of the imagination will give us a fair idea of his reactions. . . . it is plain that any wideawake Eskimo would instantly recognize a new culture. In fact, one of the great values to be derived from the study of different peoples, is the attainment of a perspective, or a horizon, from which we begin to see our own culture from the outside. . . . To come to the point then, we ourselves do have a culture which can be characterized by certain obvious traits, and which, when viewed from the outside, is made up of things and fancies just as queer looking and seemingly senseless, as those of the most despised peoples of the earth.

ここに表明されたウィスラーの文化観を「文化対比主義」⁸と呼びたい。生活様式の違いを対比的に捉えるために文化という語が用いられているからである。

前稿（沼崎 2013 : 51）で指摘したように、クッシングもまた、アメリカ（白）人読者を“those controlled by a culture totally at variance with that of the Zuñis”（Cushing 1974 [1884-1885] : 18）と呼んでいた。マーク（Mark 1980 : 121）によれば、クッシングらのアメリカ民族学は、アメリカ先住民文化を外部の「白人」に伝える通訳の役割を担っていた。モルガン（Morgan 1985 [1877]）もまた「独特の文化（a distinct culture）」と「特有の生活様式（a particular mode of life）」を未開社会に見出していた。彼もまた、イロコイ文化の通訳であった。ウィスラーは、アメリカ民族学に伝統的な通訳の文化観を引

⁸ 文化対比主義は、素朴なロマン主義でもあり得るし、時にはオリエンタリズムに陥る危険も孕んでいる。また、必ずしも相対主義を含意せず、文化相対主義とは区別すべきである。この点については稿を改めて論じたい。

き継いでいると言えるのではないか。

1929年の『社会人類学入門』では、社会人類学の研究対象が「社会生活 (social life)」であると指摘したうえで、ウイスラーは次のように述べる (Wissler 1929: 12, 強調は引用者):

Sometimes we speak of this social life as *civilization*, but in social anthropology, the term *culture* is preferred; and *culture*, when used in this technical sense, includes all the group activities, or the conventionalized habits, of a tribe or a community. . . . when the term culture is used in social science, it does not imply values or ratings, as higher or lower, ignorant and enlightened, etc., but stands for that which is expressed in the term “habits and customs of a tribe.”

部族または共同体の「慣行化された習癖 (the conventionalized habits)」すなわち「慣習 (customs)」が文化なのだというわけである。そして、文化概念の記述性と客観性が強調される。ウイスラーはまた “the mode of life followed by the community or the tribe is regarded as a culture” とも述べている (Wissler 1929: 15)。ウイスラーは続けて、“The tribal culture includes all standardized social procedures, such as those followed in marriage, property, recreation, industry, art, labor, beliefs, ceremonies, etc.” とも述べているので、生活様式とは生活の様々な領域で「標準化された社会的手続き」のことであり、それは「慣行化された習癖」の言い換えであると思なすことができよう。

3. アルフレッド・L・クローバーとアレグザンダー・A・ゴールデンワイザー

ウイスラーとローウィが早くから文化の概念を民族学あるいは社会人類学 (文化人類学) の中心に据えたのに対して、クローバーとゴールデンワイザーは、当初、文明の概念を基盤に人類学を構想していた。

1917年にクローバーは「超有機的」と題する長大な論文を発表している (Kroeber 1917)。この論文は「文化の超有機体説」を提唱した古典と見なされているが、全文 51 頁のなかで、文化の語は僅か 6 回しか使われていない。一貫して用いられるのは、文明という語であり、それも単数形で書かれている。クローバーは、文明は「社会的 (the social)」あるいは「文化的 (the cultural)」な存在であって、生身の個人から独立した

存在であり、それゆえに「超有機的 (the superorganic)」と呼びうると述べ、その発展は有機体の進化とは本質的に異なり、蓄積的で加速度的であると主張する。論文の主旨は、人類文明の発展様式は、生物進化の様式とは本質的に異なり、生物進化の法則を人類文明史に適用することはできないというものである。しかし、注目すべきは、クローバーが文化ではなく文明という語を用い、しかも時代や民族の違いを超えた文明の総体を人類史的に論じている点である⁹。

1923年出版の『人類学』においても、クローバーは文明という語を単数形でも複数形でも使い続ける。文化人類学の説明も、「諸文明」の理解というものである (Kroeber 1923: 6, 強調は引用者):

... if we wish to know the principles that go into the shaping of human social life or *civilization*, China counts for as much as France, and the ancient past for as much as the nearby present. ... Here, then, is the cause of the seeming preoccupation of social or cultural anthropology with ancient and savage and exotic and extinct peoples: the desire to understand better *all civilizations*, irrespective of time and place, in the abstract or in form of generalized principle if possible.

文化という語も本文中で使われてはいるが、章題に使われているのは専ら文明という語であり、「人類文明の始原」と題された章には、次のような文章が見られる (Kroeber 1923: 138, 強調は引用者):

All such artifacts—tools, weapons, or anything constructed—are a reflection of the degree of “culture” or *civilization*, elementary or advanced, possessed by the beings who made them.

何よりも本書全体が人類文明史の再構成となっている点が重要である。本書は、長く人

⁹ 後年クローバーは、第一次世界大戦当時、ドイツ語の“Kultur”はプロパガンダ用語と認識されていたので、世間の誤解を恐れて文化という語を用いなかったと弁明している (Kroeber and Kluckhohn 1963 [1952]: 52-53)。確かに、大戦はドイツの文化と英米仏の文明の間の闘いと喧伝されていた。しかしながら、たとえ文明を文化と言い換えたとしても、クローバーが複数の個別民族文化ではなく単一の人類文化を総体的に論じていたことに変わりはない。

類学の代表的教科書として大学で使われた。大幅な改訂がなされ、文化という語が前面に出てくるのは第二次世界大戦後、1948年のことである (Kroeber 1948)¹⁰。

クローバーの『人類学』出版の前年、1922年にゴールデンワイザーの『早期文明』(Goldenweiser 1922)が刊行されている。副題は人類学入門だ。人類学の研究対象は文明だと、書名が宣言しているわけである。「早期 (early)」という語は、始まりに近いこと、若いことを意味する。したがって、早期文明とは成長あるいは発展の初期段階にある文明という意味になる。それでは、文明とは何か。ゴールデンワイザーの答えは次のようなものである (Goldenweiser 1922 : 15) :

Our attitudes, beliefs and ideas, our judgments and values ; our institutions, political and legal, religious and economic ; our ethical code and our code of etiquette ; our books and machines, our sciences, philosophies and philosophers—all of these and many other things and beings, both in themselves and in their multiform inter-relations, constitute our civilization.

さらに、これら文明の諸要素は有機的に連関している (Goldenweiser 1922 : 31) :

The different aspects of civilization interlock and intertwine, presenting—in a word—continuum, which must be studied as an organic unit. This applies to modern society and even more emphatically to primitive society.

そこで、早期文明の具体例として本書第I部に登場するのが、極北のエスキモー、アメリカ北西太平洋岸のトリンギットとハイダ、アメリカ北東部のイロコイ、アフリカのウガンダ、中央オーストラリアのアボリジニーである。そして、それぞれに一章が割かれ、それぞれの全体像が描かれる。その理由は“The only way, then, to know early civilization is to study it in the wholeness of its local manifestation”だとゴールデンワイザーは述べている (Goldenweiser 1922 : 31)。ここで重要なのは、早期文明が無冠詞の単数形であることだ。第I部の表題が“Early Civilizations Illustrated”であり、エスキモーやア

¹⁰ この改訂版においても文明という語が消えたわけではなく、人類文明史はクローバーの関心事であり続けた。

ポリジニーも、それぞれ個別に“an early civilization”ではあるのだが、個々の早期文明は、早期文明一般の局所的な表出 (local manifestation) でもある (に過ぎない?) というわけだ。ゴールデンワイザーは言う (Goldenweiser 1922 : 115, 強調は原文) :

In these five primitive communities we encounter all of the aspects tht characterize human civilization, including our own. Religion, art, social and political organization, industries, economic pursuits and ideas, all of these elements are represented. Thus, from the very start it must be recognized that *common humanity*, not only in matters psychological but also in civilization, is revealed in all of the cases here analyzed.

これを、ゴールデンワイザーは“*man is one, civilizations are many*”と標語化するのである (Goldenweiser 1922 : 14, 強調は原文)。この標語は、後に広く引用されることとなる。

1937年の『人類学』になると、文明という語は影を潜め、文化の語が全面に出てくる。本書でゴールデンワイザーは文化の定義を明示していないが、次の文章は彼の文化観を要約している (Goldenweiser 1937 : 45-46) :

... culture is historical or cumulative, ... it is communicated through education, deliberate and non-deliberate, ... its content is encased in patterns (that is, standardized procedures or idea systems), ... it is dogmatic as to its content and resentful of differences, ... its contribution to the individual is absorbed largely unconsciously, leading to a subsequent development of emotional reinforcements, ... finally, . . culture in its application and initial absorption is local.

1922年の文明の説明が具体的な要素の羅列だったの対して、1937年の文化の説明は抽象的な特性の列挙になっている。また、1937年の『人類学』では、個別文化の全体像の記述が消え、様々な民族の様々な制度や慣行は系統的に分類整理されて、本書を通して無冠詞で単数形の未開文化 (primitive culture) の全体像が描き出される。副題が「未開文化への導入 (An Introduction to Primitive Culture) とされた所以であろう。

4. ポール・ラディン

ラディンは、『社会人類学』(Radin 1932)においても『民族学の方法と理論』(Radin 1987 [1933])においても、文化と文明を定義せず、時に互換的に用いている。『社会人類学』は人類学を専門としない読者を想定し、“tribes that will bring out vividly the whole gamut of primitive man’s achievement”を素材として、トピック毎に“primitive cultures”を具体的に提示することを目的としていた(Radin 1932 : viii)。『民族学の方法と理論』においては、“Ethnology is the study of aboriginal cultures”であり、“Our primary duty is to the specific tribe we are describing”であると述べる(Radin 1987 [1933] : cxvii)。さらにラディンは、民族学には、文化進化の諸段階の再構成、人類文化の多様性の総体的実証、特定文化の個別的記述(a specific account of a given culture)の三種の研究傾向があったと述べ、自身は三番目の立場に立つと述べる(Radin 1987 [1933] : cxviii-cxx)。

ボアズの弟子たちのなかで、“a complete account of an aboriginal culture”(Radin 1987 [1933] : cxviii)を最も強調したのはラディンであった。彼が求めたのは“complete study of the aboriginal cultures—each culture for itself”(Radin 1987 [1933] : 27)であり、そのためには“an intensive and continuous study of a particular tribe, a thorough knowledge of the language, and an adequate body of texts”(Radin 1987 [1933] : 184)が必要なのだった。

5. エドワード・サピア

1924年の論文「文化、本物と偽物」(Sapir 1924)において、サピアは文化の意味は三種あると述べる。第一は、民族学的ないし文化史的な意味で、“any socially inherited element in the life of man, material and spiritual”すなわち“a complex network of traditionally conserved habits, usages, and attitudes”である(Sapir 1924 : 402)。第二は、より一般的で教養主義的な“individual refinement”という意味である(Sapir 1924 : 403)。第一の意味での文化は、「複雑で発達した」という日常語の語感さえ無ければ、文明と呼んでよいとサピアは言う(Sapir 1924 : 403)。そして、第二、第三の意味での文化との混同を避けるために、本論文ではサピアは文明という語を第一の意味の文化の代わりに用い、第三の文化の定義に組み込むのである。それは、“those general attitudes, views of life, and specific manifestations of *civilization* that give a particular people its distinctive place in the world”すなわち“*civilization* in so far as it embodies the national genius”である(Sapir

1924 : 405, 強調は引用者)。そして、サピアは次のように主張する (Sapir 1924 : 406, 強調は引用者) :

. . . nationalities, using the word without political implication, have come to bear the impress in thought and action of a certain mold and that this mold is more clearly discernible in certain elements of *civilization* than in others. The specific *culture* of a nationality is that group of elements in its *civilization* which most emphatically exhibits the mold. In practice it is sometimes convenient to identify the national *culture* with its genius.

この点について、サピアは、フランス精神 (the French spirit) を引き合いに出し、次のように解説している (Sapir 1924 : 407, 強調は引用者) :

Those elements of French *civilization* that give characteristic evidence of the qualities of its genius may be said, in our present limited sense, to constitute the *culture* of France ; or, to put it somewhat differently, the *cultural* significance of any element in the *civilization* of France is in the light it sheds on the French genius.

第三の意味での文化とは、第一の意味の文化すなわち文明のなかで、その担い手の個性と独創性を強く表している部分、“national genius”¹¹ の刻印が色濃く押された部分なのである。

そして、サピアは、第三の意味に第二の意味を加味して、“genuine culture” すなわち本物の文化という概念を提唱する (Sapir 1924 : 410) :

The genuine culture is not of necessity either higher or lower ; it is merely inherently harmonious, balanced, self-satisfactory . . . It is the expression of a richly varied and yet somehow unified and consistent attitude toward life, an attitude which sees the sig-

¹¹ この語の的確な和訳を見いだす力量が筆者にはない。この語がロマン主義的な民族精神のようなものを意味していないことは、注記しておかなければならない。サピアは、“national genius” はあくまでも歴史的に形成されたものであると、いわば構築主義的に捉えている。

nificance of any one element of civilization in its relation to all others.

その対局にあるのが、“spurious”な偽物の文化である。そして、サピアは、当時のアメリカ文化は“spurious”だと批判しているわけである。“genuine culture”という概念は、文化批判の武器なのである。サピアの文化観を象徴するものとして、“Civilization, as a whole, moves on ; culture comes and goes” (Sapir 1924 : 413) を引用しておこう。もちろん、ここで彼の言う文化は“genuine culture”のことである。

6. ルース・ベネディクトとマーガレット・ミード

個別文化の研究としての人類学を、最も世に広めたのはルース・ベネディクトとマーガレット・ミードであろう。

ベネディクトのほうが年長であるが、単著の出版はミードのほうが早い。1928年出版の『サモアにおける成人』(Mead 2001 [1928])は、ベストセラーとなった。本書で注目すべきは、ミードが文明という語を多用していることである。“Samoan civilisation”と“American civilisation”という表現が随所に見られる。ミードは、読者に“a different and contrasting civilisation, another way of life”を鏡として、“self-conscious and self-critical”になって欲しいと書く (Mead 2001 [1928] : 10-11)。ところが、僅か2年後に出版された『ニューギニアにおける生育』(Mead 2001 [1930])では、文明ではなく文化が多用され、“Manus culture”が“American culture”と対比される。本書では、文化は“a way of life”の意味で用いられており、2年前の著書の文明と同義である¹²。

ルース・ベネディクトは、「慣習の科学」と題する1929年の小文において、文化を“that complex whole which includes all the habits acquired by man as a member of society”と定義している (Benedict 1931 [1929] : 806)。これは、タイラーの古典的定義の大胆な省略形であるが、「習癖 (habits)」のみ取り出しているところに注意したい。その際、ベネディクトが言及するのはタイラーの著作ではなく、デューイによる慣習の重要性の指摘である¹³。

¹² なぜミードの用語法が2年で文明から文化へと変化したのかは定かではない。今後の研究課題としたい。

¹³ ベネディクトは出典を明記していないが、デューイが習癖と慣習の社会的重要性を論じたのは、1922年の『人間性と行為』(Dewey 2007 [1922])においてである。

この小文の一部は『文化の諸様式』の第一章「慣習の科学」に組み込まれるが、ここでは文化の定義は“the ideas and standards they have in common”と言い換えられている (Benedict 2005 [1934] : 16)¹⁴。ミード (Mead 2005 [1959] : xiii) によれば本書ほど人類学的な文化概念の普及に貢献した著作はないが、ベネディクトは本書で文明という語も多用しており、本書の題材であるズニ、ドブ、クワキツルを“three primitive civilizations”と呼んでいる (Benedict 2005 [1934] : 56)¹⁵。

しかし、やはり最も注目すべきは次の表明であろう (Benedict 2005 [1934] : 50) :

Anthropologists are turning from the study of primitive culture to that of primitive cultures, and the implications of this change from the singular to the plural are only just beginning to be evident.

ストックキングの言う人類学的文化概念へのパラダイム転換 (Stocking 1968 [1966]) を、これほど明瞭に表現した文章は他にない。文化を複数形で捉える必要があるのは、言うまでもなく、個々の文化の「諸様式 (patterns)」とその「形態 (configurations)」が個性的だからであり、それぞれの文化には「統合」(integration) が見られるからである。

7. ウィルソン・ワリス

1926年の『人類学入門』において、ワリスは社会人類学を“the story of cultures, their development, achievement, and interrelations”と定義する (Wallis 1926 : 3)。しかし、社会人類学の対象は “[t]he cultures of contemporaneous savages” である (Wallis 1926 : 5)。ワリスは、次のようにも言う (Wallis 1926 : 6, 強調は引用者) :

... all of the fundamental activities which characterize civilization are found in savagery, ... , therefore, a *primitive culture is a civilization*, less complex than our own, but each has dormant within in it all of the achievements which mark the superiority of the present age over those which have preceded.

¹⁴ ベネディクトが再び「習癖 (habits)」を中心概念に据えるのは『菊と刀』(2005 [1946]) においてである。

¹⁵ ベネディクトがサビア流に文化と文明を使い分けている可能性もあるが、断定はできない。

さらに, “Primitive culture is not one, but many” (Wallis 1926 : 105) と未開文化の複数性を強調し, 1930年の『文化と進歩』においては “the most fruitful conception of Western civilization views it as a culture” と述べている (Wallis 1930 : 19)。野蛮と文明を分けつつも, 両者を文化として扱いうるとワリスは主張するわけである。

文明と文化の関係に関するワリスの最も明瞭な表明は, 1927年の『社会学入門』における次の一節であろう (Wallis 1927 : 5) :

When we speak of “civilization” we usually refer to our own civilization, the culture of Western Europe. Since this is the case we shall employ the word “culture” to refer to any form of civilization—primitive, savage, barbarian, or the most advanced. Culture connotes all aspects of civilization, such as language, art, religion, science, social organization, manufactured objects, and all industries and activities which are a phase of group life.

文化は, 文明の諸側面の総体という意味と, 多様な文明の一形態という意味を持つのである。

8. ラルフ・リントン

リントンは, 1936年の『人間の研究』において, 学習された行動, 特に特定集団に共有された「習癖 (habits)」が継承されることを「社会的遺伝 (social heredity)」と呼び, それこそが「文化」だと言う (Linton 1936 : 76-78)。そして, 次のように述べる (Linton 1936 : 78, 強調は原文) :

The term is used in a double sense. As a general term, *culture* means the total social heredity of mankind, while as a specific term *a culture* means a particular strain of social heredity. Thus *culture*, as a whole, is composed of a vast number of *cultures* each of which is characteristic of a certain group of individuals.

無冠詞の文化は人類文化の総体を意味し, 単数形あるいは複数形の文化は特定の個別文化を意味するというわけである。

9. まとめ

1910～30年代のアメリカ人類学における文化概念と文明概念の特徴は、次のように整理することができる。

第一に、ボアズの弟子たちは、文明という語を使い続けており、しかも未開社会へと拡張し、複数化した。エスキモーも、オーストラリアのアボリジニーも、アメリカ先住民も、サモア人も、それぞれ独自の文明を持つと彼らは主張したのである。野蛮 (savagery) という言葉を使い続けるワリスも、野蛮人の文化も文明の一形態であり、西洋文明も数ある文化の一つに過ぎないと認めるのである。すなわち、西洋文明は“the civilization”でも“the culture”でもなく、あくまでも“a civilization”または“a culture”ではないのだと、アメリカ人類学全体が主張し始めたわけである¹⁶。

しかしながら、第二に、人類の所産の総体というタイラー的な文化概念は廃れてはいない。ローウィは文化と呼び、クローバーは文明と呼ぶが、彼らが無冠詞の単数形で使う文化または文明という語は、タイラー的な意味を保持している。過去から現在に至る複数の諸文明または諸文化を包括する人類全体の“the civilization”または“the culture”は、アメリカ人類学の研究対象であり続けているのである。これは、文化対比主義的なウイスラーも同様である。

第三に、タイラー的な文化概念を維持しながらも、アメリカ人類学の文化概念は、「習癖 (habits)」すなわち意識的あるいは無意識の学習によって継承される行動と思考の反復されるパターンへと焦点を絞っていく¹⁷。

第四に、個別文化それ自体の研究を重視する傾向が現れる。ラディンがそうであり、サピアからベネディクト、ミードへの流れがそうである。これは、アメリカ民族学の文化対比主義を引き継ぐ流れでもある。しかし特に重要なのは、サピアの言う“national genius”あるいはベネディクトの言う「形態」のように、新しい文化概念が提唱され始めたことである¹⁸。

それでは、ボアズの『改訂版』はどうであろうか。

¹⁶ この点は当時のイギリス社会人類学とは対照的である。詳しくは、稿を改めて論じたい

¹⁷ これにはプラグマティズムと行動主義心理学の影響が大きいのではないかと筆者は考えているが、今後の検討課題としたい。

¹⁸ 文明を「無計画な寄せ集め、つぎはぎ細工」と呼ぶローウィに比べれば、サピアやベネディクトは本質主義的と呼ぶこともできるかもしれない。しかし、サピアもベネディクトも、文化が歴史的に構築されたものであり変化しうるものであることは自明視していた。

II 『未開人の心性』改訂版における文化と文明の用例

『未開人の心性』改訂版は、序文と 13 章からなる。その章立ては、以下の通りである。

1. Introduction
2. Historical Review
3. The Composition of Human Races
4. The Hereditary Characteristics of Human Races
5. The Instability of Human Types
6. The Morphological Position of Races
7. Physiological and Psychological Functions of Races
8. Race, Language and Culture
9. Early Cultural Traits
10. The Interpretations of Culture
11. The Mind of Primitive Man and the Progress of Culture
12. The Emotional Associations of Primitives
13. The Race Problem in Modern Society

第 1 章では、西洋文明の独自性と有色人種の劣等性が簡潔に否定された後、本書の課題として二つの問題が設定される。一つは「未開」という性質は人種的に決定されているかであり、もう一つは「未開人」と「文明人」との間に文化的断絶は存在するかである。第 2 章で人種理論の歴史が概観された後、第 3 章から第 7 章が、第一の問題の検討に当てられる。そこでは人種的特徴の集団内変異は集団間変異よりも大きく、また人種的特徴は可変的で、いかなる「純粹」人種も認定できないこと、そして人種と社会問題の相関は幻想であること、つまり「未開」人種は存在しないことが示される。第二の問題の考察は、第 8 章から第 12 章においてなされる。ボアズの回答は、「未開人」と「文明人」は、その心性において本質的に同一であり、文化的断絶は見かけ上のものに過ぎないというものである¹⁹。第 13 章では、再び現代世界の人種偏見が吟味され、優生学の

¹⁹ 1927 年『未開芸術』において、ボアズは次のように述べていた (Boas 2010 [1927]: 2):

Anyone who has lived with primitive tribes, who has shared their joys and sorrows, their privations and

誤謬が指摘され、アメリカ黒人の劣等性が否定される。そして、本書は次のように結ばれる (Boas 1965 [1938]: 242):

Freedom of judgment can be attained only when we learn to estimate an individual according to his own ability and character. Then we shall find, if we were to select the best of mankind, that all races and nationalities would be represented. Then we shall treasure and cultivate the variety of forms that human thought and activity has taken, and abhor, as leading to complete stagnation, all attempts to impress one pattern of thought upon whole nations or even upon the whole world.

上記引用中の“forms that human thought and activity has taken”は、“cultures”と言い換えてよいだろう。そして、“one pattern of thought”が“a culture”であるとすれば、ボアズは多数の異なる文化の尊重と発展を賞揚していると考えられる。

本書における文明と文化の出現頻度を章毎に示したのが表 1 である。

文化の出現数は、文明の倍以上である。『初版』と比較すると、文明の出現数がほとんど変わらないのに対して、文化の出現数が倍以上に増えており、特に複数形の文化の出現数は 4 倍以上になっている。前稿 (沼崎 2013) 同様、先ず複数形の文化の用法から検討する。

表 1 『未開人の心性』改訂版における文明と文化の出現頻度

	章														合計
	序	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	
culture	1	17	13	1	0	1	0	8	51	15	44	31	14	6	202
cultures	0	2	2	0	0	0	0	2	4	6	4	8	0	2	30
civilization	0	32	1	0	0	0	0	11	0	1	11	12	12	1	81
civilizations	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	7

(出所) 筆者作成

their luxuries, who sees in them not solely subjects of study to be examined like a cell under the microscope, but feeling and thinking human beings, will agree that there is no such thing as a “primitive mind,” a “magical” or “prelogical” way of thinking, but that each individual in “primitive” society is a man, a woman, a child of the same kind, of the same way of thinking, feeling and acting as man, woman or child in our own society.

1. “cultures” の用法

『初版』には見られなかった複数形の文化の用法が、『改訂版』に現れる：

- (1) The author misinterprets the views of all those authors who dwell upon the difference in the “genius of cultures,” as defending the theory of hereditary determination. (第2章 p. 40 脚注)
- (2) The understanding of the character of foreign cultures is much more definite among all members of this group. (第2章 p. 42-43)
- (3) We only find an expression of the application of these faculties to more or less highly individualized cultures. (第7章 p. 134)
- (4) . . . the culture of any given tribe, . . . , can be fully explained only when we take into consideration its inner growth as well as the effects of its relations to the cultures of its near and distant neighbors. (第9章 p. 157)
- (5) . . . the ancient cultures of the Argentine and New Mexico. (第9章 p. 159)
- (6) It would seem that the regions of advanced cultures in Mexico, Central America and Peru . . . (第9章 p. 159)
- (7) . . . because modern cultures are complex . . . (第9章 p. 159)
- (8) . . . in modern cultures greater logical or psychological consistency may be observed . . . (第9章 p. 161)
- (9) . . . as though the mental activities of perfectly normal people of foreign cultures could be explained by the mentally affected of our own culture. (第10章 p. 162)
- (10) We value the cultures of California Indians . . . (第11章 p. 182)
- (11) In the poorest cultures, in which the whole energy of every individual is required for the acquisition of the barest needs of life, . . . (第11章 p. 185)
- (12) In Egypt and western Asia highly developed cultures existed . . . (第11章 p. 188)
- (13) . . . the alleged specific differences between the cultures of different peoples . . . (第13章 p. 231)

他の17箇所は，“races”や“languages”などと対置されるか、特定の地域や民族と結びつかない用例であり、『初版』と同じである。しかし、上記13例は、明らかに異なる。

用例 (1) は、人種理論の歴史に関する Theophile Simar の著作を批判的に紹介した脚注のなかに現れる。ここでボアズが言う“genius of cultures”はヘルダーらの概念を指しているが、それを人種的に決定されるものと理解してはならないとボアズは述べている。それゆえ、“Volk”でも“Nation”でもなく、文化の“genius”と書いたのであろう²⁰。

(2) の“foreign cultures”もヘルダーやヴァイツに言及するなかで使われており、「諸外国文化」の意である。用例 (3), (4), (9), (10), (13) も、固有名は用いられていないが、特定集団の文化の複数形であることは明らかだ。そして、用例 (5), (6), (10), (12) は固有の地域名や民族名とともに用いられており、特定文化の複数形であることが分る。このような用例は、ストッキングの言う人類学的な文化概念をボアズが持っていたことを示すものである。

用例 (7) と (8) は、ボアズが彼と同時代の西洋社会のなかに複数の文化を認めていることを示す。人類学的な文化概念が、「文明人」の社会にも適用されたことになる。

2. “culture” の用法

先ず注目すべきは、『改訂版』では、第 9 章「早期の文化特性」の冒頭で、文化が次のように定義されるということである (Boas 1965 [1938]: 149):

Culture may be defined as the totality of the mental and physical reactions and activities that characterize the behavior of the individuals composing a social group collectively and individually in relation to their environment, to other groups, to members of the group itself and of each individual to himself. It also includes the products of these activities and their role in the life of the groups. The mere enumeration of these various aspects of life, however, does not constitute culture. It is more, for its elements are not independent, they have a structure.

些か煩雑な定義であるが、ボアズが 1930 年に“Culture embraces all the manifestations of

²⁰ ボアズは、ベネディクトの『文化の諸様式』への序文において、“Dr. Benedict calls the genius of culture its configuration”と述べている (Boas 2005 [1934]: xxiii)。このことから、サピアの“national genius”やベネディクトの「形態」概念に、晩年のボアズは一定の支持を与えていたと思われる。しかし、サピアと異なり、民族ではなく文化の“genius”と書いているのである。

social habits of a community, the reactions of individuals as affected by the habits of the group in which he lives” (Boas 1930 : 79) と書いていることに照らすと、上記引用の最初の長い一文は、対自然的関係および対人的関係において集団とその中の個人の両者を特徴付ける「習癖 (habits)」すなわち「慣習 (customs)」を指し、1929年のベネディクトの定義、1934年のローウィの定義と同様のものだと解釈できよう²¹。第二の文は、いわゆる物質文化 (material culture) を指す。そして、第三および第四の文は、文化要素の相互関係を指摘するものである。これは、文明は一つの“continuum”だという1922年のゴールデンワイザーの発言に通じるし、ベネディクトの言う統合 (integration) と同趣旨であろう²²。さらに、ボアズは、文化には、物質文化 (合理的知識を含む)、社会関係、芸術と宗教 (道徳的慣行、礼儀を含む) の三領域があると述べる (Boas 1965 [1938] : 149)²³。

しかしながら、ボアズは『改訂版』で個別文化の構造ないし統合を具体的に論じてはいるに注意すべきである。上記引用に続いて、ボアズは人間と他の動物との対比を論じ始める (Boas 1965 [1938] : 149) :

The activities enumerated here are not by any means the sole property of man, for the life of animals is also regulated by their relations to nature, to other animals and by the interrelation of the individuals composing the same species or social group.

そして、生生活動と社会関係の両面において人間以外の動物も文化を持つかが考察され、他の動物も「生活様式 (“mode of life”)」あるいは「習癖」は持つと言えるが、文化を持つとまでは言えないと結論される (Boas 1965 [1938] : 149-152)。しかし、「生活様式」と「文化」の間に明瞭な線引きはできないとボアズは言う (Boas 1965 [1938] : 152)。

²¹ ボアズは、『人類学と現代生活』においても、習癖という語を多用し、たとえば“culturally acquired automatic habits . . . are among the most important sources of conservatism”述べている (Boas 2009 [1932] : 145)。

²² ところが、ボアズは次のようにも述べている (Boas 1965 [1938] : 145-146) :

. . . the vague term “culture” . . . is not a unit which signifies that all aspects of culture must have had the same historical fates. . . There is no reason that would compel us to believe that technical inventions, social organization, art and religion develop in precisely the same way or are organically and indissolubly connected.

この部分は『初版』の「疑似定義」(Kroeber and Kluckhohn 1963 : 86) の書き換えであるが、文化の変化には構造的性は全くないとボアズは言いたいのであろうか。

²³ これは、ボアズ編著『総合人類学』における文化の三側面 (人間と自然、人間と人間、主観的側面) の区分と同様である (Boas and Others 1938 : 4-5)。

それでは、人間の特異性はどこあるかという点，“human behavior . . . depends on local tradition and learned”という点，“human culture is differentiated from animal life by the power of reasoning, and, connected with it, by the use of language”という点、そして“ethical and aesthetic viewpoints”を持つという点である（Boas 1965 [1938] : 152-153）。「理性」と「倫理観、審美観」を人間文化の特徴に挙げるところは、人文主義的と言っていいだろう。本章が「早期」すなわち初期人類の文化特性を論じていることを想起すれば、進化の初期段階から人類は理性と倫理観、審美観を持っていたとボアズは主張していることになる。しかも、ここでボアズは無冠詞で単数形の人間文化を論じているのだから、未開人も文明人も含めて人類全体に、理性と倫理観、審美観の存在を認めているのである。

次に注目すべきは、『改訂版』でボアズが生活様式を文化とほぼ同義に使っていることである。たとえば、第 1 章「序論」冒頭の次の文章がそうである（Boas 1965 [1938] : 19）：

The Chinese, the native New Zealander, the African Negro, the American Indian present not only distinctive bodily features, but each possesses also his own peculiar mode of life.

これは、ウィスラー流の表現と言える。ウィスラーもボアズも、生活様式と言う場合には、物質文化や経済活動といった生存に必須の活動に重点がある²⁴。だからボアズは、この表現を人間以外の動物にも適用するのであろう。しかし、人間と他の動物とでは、生活様式の多様性の幅に大きな違いがある。そして人間の生活様式は、学習された“local tradition”即ち習癖であり、遺伝的・本能的な性向ではない。そこに、理性と倫理観、審美観が加わって「文化」が生まれるということになる。

『改訂版』において、最も多く見られるのは無冠詞で単数形の“culture”であり、その出現数は 90 に達する（Boas 1965 [1938] : 17, 19, 21, 25, 28, 31, 32, 39, 40, 43, 44, 45, 133, 137, 138, 139, 141, 142, 144, 145, 146, 147, 148, 149, 152, 165, 167, 168, 173, 174, 176, 179, 180, 181, 183, 184, 186, 187, 226, 230）。すなわち、上述した意味で文化一般を指す用法が一番多いのである。

²⁴ 前稿（沼崎 2013）で指摘したように、これはモルガンも同様である。生活様式の複数性と多様性とは、アメリカ民族学に伝統的な観念だと言えるのではないだろうか。

また、無冠詞の“human culture”が4度使われている (Boas 1965 [1938]: 39, 82, 153, 157)。そのうち、39頁と153頁では“animal life”と対置して、82頁では“early human culture”という形で、157頁では“the stock of human culture”という形で用いられている。これらは、進化史上の一定時点での人類文化の総体を指す用法である。

定冠詞の付く“the culture”は16回出現する (Boas 1965 [1938]: 44, 133, 138, 140, 141, 142, 157, 162, 163, 178, 181, 184, 198)。そのうち、『初版』と同じく抽象的な「文化というもの」を指すのは178頁と184頁の3例のみで、他は全て何らかの意味で文化を限定あるいは特定する「その文化」という用法である：

- (1) ... no matter what the bodily form of the carriers of the culture. (第2章 p. 44)
- (2) ... the culture in which the individuals live. (第7章 p. 133)
- (3) ... the culture of the majority ... (第8章 p. 138)
- (4) ... the culture of the California Atapascans ... (第8章 p. 140)
- (5) ... the culture of the Athapascans of New Mexico and Arizona ... (第8章 p. 140)
- (6) The culture of Africa ... (第8章 p. 141)
- (7) ... the culture and the language belonging to a single type ... (第8章 p. 142-143)
- (8) ... the culture of any given tribe, ... (第9章 p. 157)
- (9) ... the culture of child life in Europe ... (第10章 p. 162)
- (10) ... the culture in which they live. (第10章 p. 162)
- (11) ... the culture in which people live ... (第10章 p. 163)
- (12) ... the culture of a people ... (第11章 p. 181)
- (13) ... the culture of a tribe ... (第11章 p. 198)

不定冠詞“a”または数詞“one”あるいは形容詞“each”を伴った“culture”の用例は17回見られること (Boas 1965 [1938]: 23, 124, 133, 143, 144, 162, 178, 179, 182, 227) を合わせ考えると、固有文化に着目した文化の用例が『改訂版』で大幅に増えていることは明らかである²⁵。

²⁵ “African culture”が2度 (Boas 1965 [1938]: 138, 239), “Mediterranean culture” (Boas 1965 [1938]: 26), “Negro culture” (Boas 1965 [1938]: 28), “European culture” (Boas 1965 [1938]: 140), “Chinese culture” (Boas 1965 [1938]: 141) が各1度用いられているが、これは『初版』にも見られる用法で、

しかしながら、“primitive culture”は、『初版』同様、単数形で計 12 回使われていることに注意を払わなければならない (Boas 1965 [1938]: 25, 162, 163, 169, 216, 222, 223, 224, 225)²⁶。『初版』と変わらず、文明と対置される単数形の未開文化すなわち総体としての未開文化を、ボアズは『改訂版』でも問い続けているのである。その意味で、『改訂版』のボアズも「タイラー的」であり続けており、ベネディクトとは対照的と言わざるをえない。

『初版』と大きく違う点は、改訂版では“modern culture”という用例が 1 箇所あることだ (Boas 1965 [1938]: 180)。既に指摘したように、複数形の“modern cultures”も 2 度使われており、“our own culture”という用例 (Boas 1965 [1938]: 162) と共に、ボアズが西洋文明を文化と呼び始めていることが判る。

最後に、進化主義的に段階や程度を論じた文化の用法の使用頻度を、表 2 に示す。

『初版』同様、少数ではあるが、『改訂版』でも進化主義的な用法が散見される。これと関連して、“cultural achievement(s)”という表現が 12 回 (Boas 1965 [1938]: 30, 138, 147, 155, 156, 181, 185, 230, 239)、“cultural development”が 8 回 (Boas 1965 [1938]: 23, 24, 158, 164, 170, 176, 232)、“cultural progress”が 2 回 (Boas 1911: 184, 231)、各所で用いられていることも指摘しておかなければならない。第 11 章は、章題が示す通り、未開人の心性と文化の進歩を論じており、技術、知的探究、装飾芸術の領域においては、客観的な基準に照らして文化の進歩が認められるとボアズは述べる (Boas 1965 [1938]: 184)。もちろん、他の領域、たとえば社会組織においては、いかなる“absolute progress”も認められない (Boas 1965 [1938]: 187)。そして、些末なことではあるが、日常語で教養や洗練を意味する“cultured”が 2 箇所に残っている (Boas 1965 [1938]: 132, 133)。

したがって、『改訂版』においても、ボアズは「進歩」の意味を文化概念に込めていたと見るべきである。それは、人間文化の特徴に「理性」を含めたことと密接に関わっている。彼の文化観は「進歩主義的」であり続けたと言わざるをえないのである。

複数の人種や民族に跨る文化を指すものである。

²⁶ 複数形は、“primitive races and primitive cultures” (Boas 1965 [1938]: 19) と “primitive races and cultures” (Boas 1965 [1938]: 31) の 2 例が見られるのみで、いずれも人種と文化の複数性を強調するものである。

表2 進化主義的な文化の用法

	章													計		
	序	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		13	
more advanced culture	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
highly developed culture	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
the highest type of culture	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
a relatively high degree of culture	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
lower grades of culture	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
early levels of culture	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
the stages of human culture	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
their stage of culture	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
a series of stages of culture	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
higher levels of culture	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
the same level of culture	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
similar levels of culture	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
the highest state of culture	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1
stages of culture	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	2
The general state of their culture	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
The state of culture	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	2
合計	0	2	1	0	0	0	0	1	0	0	2	2	2	1	11	11

(出所) 筆者作成

3. “civilization” および “civilizations” の用法

『改訂版』における文明の用法は、単数形も複数形も、『初版』と全く変わりはない。文化の用法が変化しているのに比べて、文明の用法の一貫性は際立っている。それは、ボアズが、ローウィやゴールデンワイザーやベネディクトやミードのように、文明という語を未開社会に拡張していないということの意味する。

既に述べたように、文化という語は、現代西洋文明にも使われ初めている。しかし、現存する未開諸社会の固有文化を、ボアズは文明とは呼ばないのである。未開人と文明人の心性に本質的な差はないことを強調する著作において、なぜボアズは文明という語を、一定の発達段階に達した諸社会に限定し続けるのだろうか。それは、心性は変わらなくても、未開文化と文明とでは、やはり違いが認められるからである (Boas 1965 [1938]: 225):

Thus an important change from primitive culture to civilization seems to consist in the gradual elimination of what might be called the emotional, socially determined associa-

tions of sense-impressions and of activities, for which intellectual associations are gradually substituted. The process is accompanied by a loss of conservatism which, however, does not extend over the field of habitual activities that do not come into consciousness, and only to a slight extent over those generalizations which are the foundation of all knowledge imparted in the course of education.

文明化によって文化の「理性」的な部分の発展が始まるのであり、たとえ理性的反省の俎上に上るのは文化の極一部であって、無自覚な習癖の多くが持続するとしても、人類の知的進歩は止むこと無く続くというわけだ²⁷。文明は進歩する運動体だとボアズは言うのである。サピアのように、文明の歩みは止まずとも文化は偽物に転化しうるとは考えない。

それは、『初版』において「文明の前進 (advance of civilization)」を熱く論じた文章 (Boas 1911 : 206) と「連帯感 (the feeling of fellowship)」の拡大を論じた文章 (Boas 1911 : 207-208) が、どちらも一字一句変わらず『改訂版』でも繰り返されている (Boas 1965 [1938] : 201-202) ことから明らかである。そして、未開人の心性と文化の進歩を論じた第 11 章の末尾で、『初版』における「文明相対主義」の主張 (Boas 1911 : 208) が、やはり一字一句変わらず繰り返されている (Boas 1965 [1938] : 202-203, 強調は引用者) :

It is somewhat difficult for us to recognize that the value which we attribute to *our own civilization* is due to the fact that we participate in this civilization, and that it has been controlling all our actions since the time of our birth ; but it is certainly conceivable that there may be *other civilizations*, based perhaps on different traditions and on a different equilibrium of emotion and reason, which are of no less value than ours, although it may be impossible for us to appreciate their values without having grown up under their influence. The general theory of valuation of human activities, as developed by anthropological research, teaches us a higher tolerance than the one which we now profess.

²⁷ 同様の主張が、『初版』では次のように簡潔に述べられていた (Boas 1911 : 250) :

The change from primitive to civilized society includes a lessening of the number of the emotional associations, and an improvement of the traditional material that enters into our habitual mental operations.

ベネディクトが文化の相対性という表現を使い始めているにもかかわらず、ボアズは相変わらず文明の相対性を主張し続けている。それは、前稿(沼崎 2013: 33)で述べたように、ボアズが将来の諸文明をも視野に入れて、ボアズにとっての「我々の」文明を相対化しているからだと筆者は考えるものである²⁸。

4. 文化と文明の使い分けの変化

以上の検討を踏まえ、『改訂版』における文化と文明の用法の変化を整理してみよう。

第一に、『改訂版』においては、文化という語の使用量が増大し、単数形と複数形の双方で、ストックキングの言う人類学的文化概念に近い使われ方が見られる。しかしながら、“primitive culture”の変わらぬ用法が示すとおり、文化という語をボアズは「タイラー的」にも用い続けている。ゴールデンワイザーの標語をもじって言えば、“Primitive Culture is one, primitive as well as modern cultures are many”となろうか。この観点を最も明確に表明しているのはローウィであり、ローウィはボアズの忠実な弟子であり続けたいと言えよう。また、リントンの文化の説明は、ボアズの用法が当時のアメリカ人類学で例外的なものではなかったことを示している。

第二に、『改訂版』の文化観は、人文主義的色彩を色濃く残しており、進歩主義的であり続けている。そして、文化の進歩を加速させるのが文明であるとボアズは考え続けている。そのうえで、進歩を続ける文明の複数性を認め、自身の属する文明を地理的にも時代的にも相対化する。そういう意味では、ボアズの文明観は「ヘルダー的」であった。ボアズは終生、「進歩主義的な文明相対主義者」であったと言える。

おわりに

本稿では、1910年代から1930年代のアメリカ人類学に見られる文化と文明の用法に照らして、フランツ・ボアズの1938年段階での文化観・文明観を検討し、彼の1911年段階のそれと比較した。その結果明らかになった点は二つある。第一に、アメリカ人類

²⁸ 興味深いことに、1936年の『人間の科学』において、リントンは“TO NEXT CIVILIZATION”という献辞を書いている。リントンは、たとえ全体主義が再び中世の暗黒をもたらそうとも、その後に出現する次の文明は自分たちが始めた文化の探究法を復興し開花させるだろうという祈りを込めて、この献辞を書いたと述べている(Linton 1936: 490)。彼もまた、将来の文明に照らして、自身の文明を相対化していたわけである。

学全体の流れに沿って、ボアズもストッキングの言う人類学的文化概念に接近しつつあったという点である。しかし、ラディンのように個別文化研究を優先することはなかったし、サピアやベネディクトのように文化の個性を強調することもなかった。ボアズにおいても、アメリカ人類学全体においても、1930年代末の時点では、人類学的文化概念への移行は完全には果たされていなかったのである。第二に、ボアズの文化概念は、1938年段階でも、人文主義的な色彩を色濃く残し、「タイラー的」であり続けたという点である。未開人と文明人の心性の違いは否定しつつも、文明化による文化の進歩をボアズは説き続けた。再びゴールデンワイザーをもじるなら、“Man is one, civilizations are progressing”というのがボアズのものである。第一次世界大戦を経て、大恐慌を経て、ファシズムの脅威が迫るなか、ボアズは人類の進歩を信じ続け、相対主義的であると同時に普遍主義的な文化概念を持ち続けていたのである。

しかしながら、ゴールデンワイザーの著作やリントンの著作が示すように、ボアズが『改訂版』を執筆している時期に、文明概念を放棄して文化概念へと移行する傾向がアメリカ人類学に現れ始める。それでは、ボアズは、過渡的な存在でしかなかったのだろうか。次稿では、ボアズの現代的意義を再検討したい。

引用文献

Benedict, Ruth

- 1931 [1929] “The Science of Custom.” Pp. 805-817 in V.F. Calverton (Ed.), *The Making of Man: An Outline of Anthropology*. New York: The Modern Library, Inc.
 2005 [1934] *Patterns of Culture, with a New Forward by Louise Lamphere*. Boston and New York: Houghton Mifflin Company.
 2005 [1946] *Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture, with a New Forward by Ian Buruwa*. Boston and New York: Houghton Mifflin Company.

Boas, Franz

- 1911 *The Mind of Primitive Man: a Course of Lectures Delivered Before the Lowell Institute, Boston, Mass., And the National University of Mexico, 1910-1911*. New York: The Macmillan Company.
 1928 *Anthropology and Modern Life*. New York: W.W. Norton & Company, Inc.
 1930 “Anthropology.” Pp. 73-110 in Edwin R.A. Seligman and Aviln Johnson (Eds.), *Encyclopædia of Social Sciences, Volume II*. New York: The MacMillan Company.
 1932 *Anthropology and Modern Life: A New and Revised Edition*. New York: W.W. Norton & Company, Inc.
 1938 *The Mind of Primitive Man*. Revised Edition. New York: The Macmillan Company.
 1963 [1938] *The Mind of Primitive Man, Revised Edition, with a New Forward by Professor Melville J.*

Herskovits. New York : Collier Books.

- 1965 [1938] *The Mind of Primitive Man, Revised Edition, with a New Forward by Melville J. Herskovits*. New York : The Free Press.
- 1982 [1940] *Race, Language and Culture*. Chicago : University of Chicago Press.
- 1986 [1932] *Anthropology and Modern Life, with an Introduction by Ruth Bunzel*. New York : Dover Publications, Inc.
- 2005 [1934] "Introduction." Pp. xxi-xxiii in Ruth Benedict, *Patterns of Culture, with a New Forward by Louise Lamphere*. Boston and New York : Houghton Mifflin Company.
- 2009 [1932] *Anthropology and Modern Life, with a New Introduction and Afterword by Herbert S. Lewis*. New Brunswick : Transaction Publishers.
- 2010 [1927] *Primitive Art, with a New Introduction by Aldona Jonaitis*. Mineola, New York : Dover Publications, Inc.

Boas, Franz and Others

- 1938 *General Anthropology*. Boston : D. C. Heath and Company.

ボアズ・フランツ

- 2011 『プリミティヴアート』(大村敬一訳), 言叢社。
- 2013 『北米インディアンの神話文化』(前野佳彦訳), 中央公論新社。

Braun, Sebastian

- 1998 "Paul Radin : an Attempt at an Intellectual Biography." <http://www.und.edu/instruct/sbraun/RADIN.pdf>, 2013年10月7日参照。

Cushing, Frank Hamilton

- 1974 [1884-1885] *Zuni Breadstuff*. New York : Museum of the American Indian, Heye Foundation.

Darnell, Regna

- 2010 *Edward Sapir : Linguist, Anthropologist, Humanist, with a New Introduction*. Lincoln and London : University of Nebraska Press.

Deacon, Desley

- 1997 *Elsie Clews Parsons : Inventing Modern Life*. Chicago and London : The University of Chicago Press.

Dewey, John

- 2007 [1922] *Human Nature and Conduct : An Introduction to Social Psychology*. New York : Cosimo Classics.

Freed, Stanley A. and Freed, Ruth S.

- 1992 "Clark Wissler 1870-1947." National Academy of Sciences. <http://www.nasonline.org/publications/biographical-memoirs/memoir-pdfs/wissler-clark.pdf>, 2013年10月7日参照。

Goldenweiser, Alexander A.

- 1922 *Early Civilization : An Introduction to Anthropology*. New York : Alfred A. Knopf.
- 1937 *Anthropology : An Introduction to Primitive Culture*. New York : F.S. Crofts & Co.

Kluckhohn, Clyde

- 1958 “Ralph Linton, 1893-1953.” National Academy of Sciences. <http://www.nasonline.org/publications/biographical-memoirs/memoir-pdfs/linton-ralph.pdf>, 2013 年 10 月 8 日参照。

Kroeber, A. L.

- 1917 “The Superorganic.” *American Anthropologist*, N.S. 19 : 163-213.
 1923 *Anthropology*. New York : Harcourt, Brace and Company.
 1948 *Anthropology : Race, Language, Culture, Psychology, Prehistory*. New York : Harcourt, Brace and Company.

Kroeber, A. L., and Kluckhohn, Clyde

- 1963 [1952] *Culture : a Critical Review of Concepts and Definitions*. New York : Vintage Books.

Kroeber, Theodora

- 1970 *Alfred Kroeber : A Personal Configuration*. Berkeley, Los Angeles and London : University of California Press.

Linton, Ralph

- 1936 *The Study of Man : An Introduction*. New York : Appleton-Century-Crofts, Inc.

Lowie, Robert H.

- 1917 *Culture and Ethnology*. New York : Douglas C. McMurtrie.
 1920 *Primitive Society*. New York : Boni and Liveright Publishers.
 1929 *Are We Civilized? : Human Culture in Perspective*. New York : Harcourt, Brace and Company.
 1934 *An Introduction to Cultural Anthropology*. New York : Farrar & Rinehart, Inc.
 1937 *The History of Ethnological Theory*. New York : Farrar & Rinehart, Inc.
 1959 *Robert H. Lowie, Ethnologist : A Personal Record*. Berkeley and Los Angeles : University of California Press.

Mark, Joan

- 1980 *Four Anthropologists : An American Science in its Early Years*. New York : Science History Publications.

Mead, Margaret

- 2001 [1928] *Coming of Age in Samoa : A Psychological Study of Primitive Youth for Western Civilisation, with an Introduction by Mary Pipher*. New York : Harper Perennial.
 2001 [1930] *Growing Up in New Guinea : A Comparative Study of Primitive Education, with an Introduction by Howard Gardner*. New York : Harper Perennial.
 2005 [1959] “Preface.” Pp. xiii-xxvi in Ruth Benedict, *Patterns of Culture, with a New Forward by Louise Lamphere*. Boston and New York : Houghton Mifflin Company.

Morgan, Lewis Henry

- 1985 [1877] *The Ancient Society*. Tucson : University of Arizona Press.

沼崎一郎

- 2013 「フランツ・ボアズにおける「文化」概念の再検討 (1) — 『未開人の心性』1911年版を中心に—」

『東北大学文学研究科研究年報』 62 : 26-56.

Radin, Paul

1932 *Social Anthropology*. New York and London : McGraw-Hill Book Company, Inc.

1987 [1933] *The Method & Theory of Ethnology, with an Introduction by Arthur J. Vidich*. South Hadley, Massachusetts : Bergin & Garvey Publishers, Inc.

Sapir, Edward

1924 "Culture, Genuine and Spurious." *American Journal of Sociology*, 29 : 401-429.

Spencer, Robert F and Colson, Elizabeth

1971 "Wilson D. Wallis, 1886-1970." *American Anthropologist*, 73 : 257-266.

Steward, Julian H.

1962 "Alfred Kroeber, 1876-1960." National Academy of Sciences. <http://www.nasonline.org/publications/biographical-memoirs/memoir-pdfs/kroeber-alfred.pdf>, 2013年10月7日参照。

1974 "Robert Harry Lowie, 1883-1957." National Academy of Sciences. <http://www.nasonline.org/publications/biographical-memoirs/memoir-pdfs/lowie-robert-h.pdf>, 2013年10月7日参照。

Stocking, George W, Jr.

1968 [1966] "Franz Boas and the Culture Concept in Historical Perspective." Pp. 195-233 in *Race, Culture, and Evolution : Essays in the History of Anthropology*. New York : The Free Press.

Tylor, Edward Burnett

2010 [1871] *Primitive Culture : Researches into the Development of Mythology, Philosophy, Religion, Art, and Custom*. Volume 1. Cambridge : Cambridge University Press.

Wallis, Wilson D.

1926 *An Introduction to Anthropology*. New York and London : Harper & Brothers Publishers.

1927 *An Introduction to Sociology*. New York : F. S. Crofts & Co., Inc.

1930 *Culture and Progress*. New York : Whittlesey House, McGraw-Hill Book Company, Inc.

1941 "Alexander A. Goldenweiser." *American Anthropologist*, N.S. 43 : 250-255.

Wissler, Clark

1923 *Man and Culture*. New York : Thomas Y. Crowell Company.

1929 *An Introduction to Social Anthropology*. New York : Henry Holt and Company.

Re-examination of Franz Boas' Concept of Culture (2) :
A Textual Analysis of *the Mind of Primitive Man*, 1938

Ichiro NUMAZAKI

This paper compares the usages of “culture” and “civilization” in the revised edition of *the Mind of Primitive Man* published in 1938, and thereby re-examines Franz Boas' conception of culture at the end of his long academic life.

During the 27-year interval between the first and the revised editions, many classic works as well as introductory textbooks were published in burgeoning American Anthropology both by the students of Boas—namely, A.L. Kroeber, A.A. Goldenweiser, R.H. Lowie, E. Sapir, P. Radin, R. Benedict, and M. Mead—and, by others such as C. Wissler, W. Wallis, and R. Linton. Examination of their writings shows that : (1) Boas' students not only extended the term “civilization” to primitive peoples but also pluralized it and talked about early or aboriginal “civilizations.” (2) They continued to use the term “culture” or “civilization” in the singular—in a Tylorian sense—to designate the whole traditions, customs and habits of entire humanity. (3) Their definition of “culture” gradually focused on “habits” or learned “patterns” of thought and behavior. (4) Some started to focus on the individuality or personality of a particular culture, e.g. Sapir's “national genius” and Benedict's “configuration.”

Textual analysis of Boas' revised edition reveals that he started to use the term “culture” in the “anthropological” sense as George W. Stocking, Jr. (1968 [1966]) calls it, but Boas also retained more “humanistic” elements, such as reason and progress in his conceptualization of “culture.” In 1938, he was still preoccupied with primitive culture as such, not primitive cultures in the plural, and in this sense remained a Tylorian. Moreover, Boas' conception of “civilization” did not change from the first edition. Unlike his students, he did not extend the term “civilization” to primitive peoples. He still talked about the transition from primitive culture to civilization as progress in rational thought, expansion of the feeling of fellowship, and individual freedom. And, Boas did not change a word in his first edition's statement of the relativity of civilizations.

Boas' conception of culture in 1938 was both anthropological and humanistic. Like Herder, he believed in the unity of human mind and the great variability in its cultural manifestations. He also believed in the power of critical reasoning and never-ending progress of humanity toward better knowledge, wider fellowship, and greater freedom. He was a universalistic “civilizational relativist” to the end.